

[論文]

# タタール世界における「トゥガン・テル」概念解釈のための試論

——タタール語詩歌における表象分析を手がかりに——

櫻 間 瑞 希

- 〈目 次〉
- 1 はじめに
  - 2 先行研究の検討と理論的考察
    - 2-1 タタール語における「トゥガン・テル」概念
    - 2-2 言語・文化・アイデンティティの関係をめぐる理論的考察
  - 3 現代タタール語詩歌における「トゥガン・テル」の表象
    - 3-1 「トゥガン・テル」と、母、父、家族との関係
    - 3-2 「トゥガン・テル」と宗教、精神性との関係
    - 3-3 「トゥガン・テル」と民族アイデンティティ、故郷との関係
    - 3-4 「トゥガン・テル」概念の重層性と言語の動態
  - 4 「トゥガン・テル」概念の言語文化的意義
    - 4-1 タタール語話者にとっての「トゥガン・テル」の意味合い
    - 4-2 「トゥガン・テル」を通じたタタール文化の継承と発展
    - 4-3 言語の復権と詩的想像力
  - 5 おわりに
    - 5-1 アンビバレントなシンボルとしての「トゥガン・テル」
    - 5-2 言語の詩学と政治性

## 1 はじめに

言語は文化の担い手であり、人々のアイデンティティを形作る重要な要素である。とりわけ母語は、個人の認知や感情、社会性の発達に大きな影響を与えるとされている [Vygotsky 1986]。そして言語の消滅が危惧されるとき、母語はより切実な意味を帯びる。本研究が目にするのは、そのような危機に直面してきたタタール語と、タタール語を母語とする人々の経験である。

タタール語は、ロシア連邦のタタールスタン共和国を中心に話されるテュルク系言語である。ソ連時代にその話者数は大幅に減少したものの、1990年代以降は復興に向けた取り組みがさまざまな領域で展開されてきた。そうした状況下で、現代タタール詩人たちは詩作を通してタタール語の復権を訴えてきた。彼らの詩に描かれる母語——「トゥガン・テル」(tuğan tel) は、単なる意思疎通の手段を超えて、民族のアイデンティティを支える文化的基盤として意味づけられている。

今日のタタール語の社会言語学的状況をめぐっては多くの研究蓄積がある一方で、現代の文学作品に表象された母語意識の分析は管見の限り手薄である。そこで本研究は、現代タタール詩歌における「トゥガン・テル」の表象分析を通して、危機に瀕した母語が文化的にどう意味づけられ、また母語を通していかなる主体性が立ち現れてくるのかを考察したい。

この作業は、タタール語という個別言語の位相を記述するだけでなく、「母語とは何か」という普遍的な問いへと通じる。私たちは普段、言語を所与のものとして無自覚に用いがちだが、母語の危機に直面した詩人の言語観はそうした自明性を問い直す契機ともなるだろう。

## 2 先行研究の検討と理論的考察

### 2-1 タタール語における「トゥガン・テル」概念

タタール語の「トゥガン・テル」は、直訳すれば「生まれのことば」[native tongue]を意味し、日本語でいうところの「母語」を指す語として広く用いられている。しかし、「母のことば」[mother tongue]を意味する「アナ・テレ」(ana tele)という語も存在し、両者を日本語で的確に訳し分けることは難しい。「トゥガン・テル」の概念をめぐることは、言語の保持と継承という観点から、様々な議論が交わされてきた。

タタール語学者のユスポワは、19世紀のタタール語辞書を手がかりに、「トゥガン・テル」の語義の変遷を辿っている。曰く「トゥガン・テル」は当初、単に母語を意味する語として使われていたが、次第に民族の尊厳や独自性を象徴することばとしてその意味を拡張していったという[Yusupova 2014]。こうした「トゥガン・テル」概念の発展は、タタール民族の覚醒と言語の標準化・近代化の進展と軌を一にしていた。

こうした知見をふまえ、義務教育学校でタタール語教師として教鞭を執るシャムスディノワは「トゥガン・テル」をめぐる意識が現代のタタール人の間でどのように醸成されているのかを、質的調査を手がかりに探っている[Shamsutdinova 2022]。そこでは、「トゥガン・テル」がタタール文化の中核をなすとの認識が広く共有されている一方で、ロシア語や英語重視の風潮のなかで訴求力が弱まることへの危機感も表明されていた。

「トゥガン・テル」の問題は、言語政策や教育といった制度的営為とも密接に関わっている。タタールスタン共和国の学校で使用されているタタール語教科書を分析したシャクロワとミルザギトフは、カリキュラム設計が民族の歴史や文化に対する誇りを育むことを重視しているという[Shakurova & Mirzagitov 2014]。

「トゥガン・テル」はタタール人を象徴するキーワードとしてもたびたび言及されてきた。たとえば、ロシアの愛国主義推進政策が非ロシア系諸民族にどのように受け止められたのかに注目したロシア研究者のドゥセは、モスクワのタタール人社会における「トゥガン・テル」の位置づけにも注目し、それがタタール人のエスニック・アイデンティティを維持するうえで重要な意味を持つことに触れている [Daucé 2015]。また、タタール語学者のギラゼディノワらは、タタールスタン共和国の言語状況と言語政策の変遷を概観したうえで、「トゥガン・テル」という概念がタタール人の民族的覚醒と結びつけられ、文化的シンボルとして意味づけられてきた経緯を示した [Gilazetdinova et al. 2014]。

このように「トゥガン・テル」という概念は、タタール人のアイデンティティ形成や言語をめぐる政治力学と密接に絡み合いながら、様々な意味合いを帯びてきたのである。他方で、言語と文化、アイデンティティの関係をめぐっては、言語相対論に代表されるように、言語の構造的特徴が話者の認知や世界観に影響を及ぼすことを示唆する理論的議論が行われてきた [Lucy 1992; Leavitt 2011]。さらに、ことばと思考の関係を社会的文脈のなかで捉えようとする言語社会化の研究や、言語の選択がアイデンティティの構築に果たす役割を検討する研究なども盛んに展開されている [Duff & Talmy 2011; Bucholtz & Hall 2004]。

本研究では、こうした言語人類学や社会言語学の知見もふまえつつ、タタール語という個別言語に即して「トゥガン・テル」概念の意味を探ってみたい。これにより現代のタタール人の言語観や世界観を理解する手がかりが得られるはずである。

## 2-2 言語・文化・アイデンティティの関係をめぐる理論的考察

ここで、言語と文化、アイデンティティの関係をめぐるいくつかの理論的視座を確認しておきたい。まず、言語の構造的特徴が話者の認知や世界観に

影響を及ぼすとする言語相対論の系譜がある。サピアとウォーフに代表されるこの立場は、言語間の差異が思考様式の差異をもたらすと考える [Sapir 1949; Whorf 1956]。たとえばウォーフは、ホピ語の時制体系が英語とは大きく異なることから、ホピ族の時間認識も英語話者とは異なると論じた [Whorf 1956]。この仮説をめぐる批判も多いが、言語の意味体系が文化的に構築される側面を浮き彫りにした点は重要である。

言語相対論を発展的に継承したのが、認知言語学である。認知言語学は、意味の創発を身体性や経験との関わりから説明しようとする。例えばレイコフとジョンソンは、英語の多くの慣用表現が「議論は戦争である」といったメタファーに基づいて成り立っていることを示し、概念が身体的経験に根ざしていると論じた [Lakoff & Johnson 1980]。つまり、言語表現は恣意的なのではなく、文化的に意味づけられた認知を反映したものという見方だ。

こうした観点は、語の多義構造の分析にも生かされている。スラヴ語学者のオスタニナ=オルシェフスカとデスポットは、ロシア語の「duša」（一義的には「魂」）という語が多様な意味を持つことを、メタファーの観点から記述した [Ostanina-Olszewska & Despot 2017]。「トゥガン・テル」という語の意味合いも、タタール文化に固有の認知の枠組みと結びついていると考えられないだろうか。

さらに、ことばの習得や使用が社会的文脈に埋め込まれた営みであることを重視するのが、言語社会化の研究である。オックスによれば、言語の学習は単に語彙や文法の習得ではなく、言語共同体の一員としてふさわしい振る舞い方を学ぶ過程でもある [Ochs 1988]。つまり、母語の習得は文化的規範の内面化と不可分だとする考え方である。これをふまえると、「トゥガン・テル」を学ぶことの意味も、タタール人としてのあり方を学ぶ社会化の過程として捉えられるだろう。

くわえて、言語使用を通じたアイデンティティの構築という観点も重要である。社会言語学者のブホルツと人類学者のホールは、言語使用がアイデンティティの指標となり、また逆にアイデンティティが言語使用を方向づける

と論じる [Bucholtz & Hall 2004]. つまり, 「トゥガン・テル」を使うという行為それ自体が, タタール人としてのアイデンティティを主張する政治的な行為ともなりうるのだ.

以上のように, 言語と文化, アイデンティティの関係をめぐっては, 認知・社会化・アイデンティティ交渉など, 多様な論点が提示されてきた. 本研究では, こうした理論的示唆を念頭に置きつつ, 現代タタール語詩歌における「トゥガン・テル」の表象分析を通してタタール語の言語文化的特質にも迫っていききたい.

### 3 現代タタール語詩歌における「トゥガン・テル」の表象

ここまでの議論をふまえると, 「トゥガン・テル」の詩的表象もまた単なる言語的事象ではなく, 話者の認知や社会的関係性, アイデンティティといった多層的な意味の布置連関のなかで捉えられるべきだろう. そこで本節では, 「トゥガン・テル」が現代タタール詩歌においてどのように表象されているのかを探ってみたい.

分析の対象として取り上げるのは, 2018年にタタールスタン書籍出版社 (Tatarstan kitap nəşriyatı) より刊行された詩集『時代の声』 (Zaman awazları) である. この詩集はさまざまな詩人によるアンソロジーで, 58名の詩人によって書かれた70篇の詩歌を収録している. 収録された詩の作者の世代や経歴は多様で, 氏名と年齢だけが明かされた市井に生きる詩人によるものが大半を占める. 『時代の声』は必ずしもタタール語をテーマにした詩集ではないが, 現在のタタール語をめぐる社会状況の変化を反映した作品が多数含まれていることから, タタール語使用をめぐる様々な位相を見渡すことができる. これらの点において, 『時代の声』は現代の人々のタタール語をめぐる認識を概観するのに適した詩集だと考えられる.

以下, 『時代の声』に収められた詩編から, 特に「トゥガン・テル」の主

題が前景化されていると思われる15篇を取り上げ、そこに見出される表象のあり方を分析してみたい。これらの詩歌を見渡してみると、「トゥガン・テル」という語が単なる意思伝達的手段として表象されているのではなく、人々の生の基層に根ざした存在として、様々な意味を担わされていることに気づかされる。そうした「トゥガン・テル」の意味の広がりを整理するために、本節では以下の3つの観点から考察を進めることにしたい。

第1の観点は、「トゥガン・テル」の習得が家族とりわけ母親との情緒的絆のなかで進められることに着目するものである。前述のオックス [1988] をはじめとする言語社会化研究が示唆するように、母語は単なる意思疎通の手段ではなく、親密な人間関係を媒介する情動的な営みでもある。したがって、母語——「トゥガン・テル」と家族の結びつきは、言語の社会的布置連関を考えるうえで欠かせない視座となるだろう。

第2の観点として、宗教が言語に及ぼす影響、および言語が担う宗教的意味合いに注目する。タタール語の場合、イスラームとの不可分な関係性が指摘できる。クルアーンの言語であるアラビア語との接触を通じて、タタール語は聖なる言語としての性格を帯びてきたともいえる。この点をふまえれば、詩的言語に織り込まれた信仰の諸相もまた、「トゥガン・テル」の重要な意味連関として浮かび上がってくるはずだ。

第3の観点は、民族の集合的アイデンティティや故郷へのノスタルジーと、「トゥガン・テル」の結びつきを問うものである。社会言語学者のフィッシュマンが指摘するように、特定の言語の使用は、単なる意思疎通ではなく、特定の民族集団への帰属意識を示す「アイデンティティの実践」ともなりうる [Fishman 1991]。また、故郷への愛着は、しばしば母語への愛着とも重なり合う。これらの観点から、詩的言語が織りなす民族の情動とアイデンティティの諸相に迫ることができるだろう。

以上の3つの視座は、いずれも言語を社会的存在として捉えようとするものでもあり、「トゥガン・テル」概念の言語文化的な意味を多角的に記述するうえで、相互に補完的な役割を果たすはずである。以下ではこれらの観点

から個々の詩作品の分析を試みていきたい。

### 3-1 「トゥガン・テル」と、母、父、家族との関係

タタール語詩歌においては、「トゥガン・テル」が母親や父親、そして家族と密接に結びつけられることが多い。その典型例として、1963年生まれのトゥファン・アフマドゥウリン (Tufan Äxmädullin) による、「Tuğan tel」(トゥガン・テル) と題された詩を挙げるができる。

Äniem tele, ätiem tele,  
Minem tuğan telem.  
Yaratam min sine çınlap,  
Gömerem belän bigräk.  
わたしの母のことば わたしの父のことば,  
わたしのトゥガン・テルよ  
わたしはあなたを心から愛する  
我が生涯にまして

ここでは「トゥガン・テル」が親から受け継がれるかけがえのないものとして称揚されている。母語への愛着が、親への愛情とパラレルに語られているのである。同様に、母親との結びつきを主題とした詩歌としては、1990年生まれのタルガト・ミルザヤノフ (Talgat Mirzayanov) の「Ana tele」(母語) が挙げられる。

Ana tele - analardan bizgä  
Büläk itep birelgän yaxşılık.  
Sabıy çakta anı bez belmibez,  
Bez anı soñınnan añlıybız.  
母語——母たちからわたしたちに  
贈り物として与えられた善良さ  
幼い頃のわたしたちはそれを知らない  
わたしたちはそれを後から理解するのだ



ここでは母語が、母親から子へと受け継がれる「贈り物」として位置づけられている。それは単なる言語の伝達ではなく、母の愛情や優しさといった情愛の表れでもある。母語の習得が母子の情愛的な絆のなかで進められることを示唆した一節といえよう。こうした母語と家族の結びつきは、1977年生まれのアリヤ・アフマトワ (Aliyä Äxmätova) による、「Änkämä」(母に)と題された詩にも見出される。

Äni birğän bu teldä söyläšem belän ğorurlanam.

Ul bit minem qotılmas baylıgım.

Kiçenge häm bügenge barlıgım.

母から授かったこのことばで話すことを誇りに思う

それはわたしのかけがえのない豊かさ

昨日と今日のわたしの存在そのもの

ここでは母語の習得が母から子への文化伝達の象徴として位置づけられている。「かけがえのない富」、「昨日と今日のわたしの存在そのもの」といった比喩表現からは、母語が自己のアイデンティティのよりどころとして意味づけられていることが読み取れる。同様の表現は、1999年生まれのリナト・ガリウッリン (Rinat Galiullin) の「Tuğan tel turında」(トゥガン・テルについて)でも見られる。

Ätkäm-äniem qabatlay-qabatlay,

Üz tellärendä tınıç sözli tordı.

Şatlıq ulasqan şatlıgı arımas,

Xaslıq ulasqan xaslıgı artmas.

父と母はくり返しくり返し

自分たちのことばで静かに話していた

喜びを分かち合えば喜びは尽きず

悲しみを分かち合えば悲しみは増さず

両親が日常会話を交わす様子が「自分たちのことばで」と形容されるのは、タタール語が家族の私的な領域に属するものとして意識されていること

の表れだろう。こうした表現は、母語が親密な人間関係のなかで習得されるという普遍的事実を反映しているといえる。オックス [1988] が指摘するように、母語の習得は単なる言語学習ではなく、家族を単位とした社会化の過程でもある。

その一方で、親との紐帯を感じさせることばとして「トゥガン・テル」を意味づける姿勢には、現代のタタール社会に特有の事情も反映されていると考えられる。家庭内でのタタール語の使用が減少するなか、親世代から受け継いだ言語の価値を再確認する営みとして、「トゥガン・テル」と家族の結びつきが強調されているのかもしれない。

### 3-2 「トゥガン・テル」と宗教、精神性との関係

タタール語詩歌では、「トゥガン・テル」がイスラーム的な宗教観や精神性と結びつけられる場合も多い。1992年生まれのグゼル・ガリウリナ (Güzäl Galiullina) による「Ayat」(章句) と題された詩では、次のような一節が見られる。

Tuğan telem minem -  
 Quran tele bulsın,  
 Minem qalğan gömerem  
 İman belän tulsın.  
 わたしのトゥガン・テルが  
 クルアーンのことばでありますよう  
 わたしの残りの人生が  
 信仰に満ちますよう

「トゥガン・テル」を「クルアーンのことば」と重ねた表現からは、母語を信仰生活と不可分な存在として位置づける姿勢が表れている。こうした母語の神聖視は1957年生まれのマラト・ワリエフ (Marat Wäliyev) の「Yul ayrılıǵı」(別れ道) からも窺える。

Tuğan tel - xodayga yul,  
Tuğan tel - jannñ aزیği.  
Ata-babalardan bizgä kilgän  
Ruxi mirasibızni saqlay ul.  
トゥガン・テルは神に至る道  
トゥガン・テルは魂の糧  
祖先からわたしたちに伝わった  
精神的遺産を守るもの

ここでは「トゥガン・テル」が信仰生活や精神性と深くかかわるものとして位置づけられている。「祖先からわたしたちに伝わった精神的遺産」という一節からは、「トゥガン・テル」がイスラームの教えを継承する媒体としても意味づけられていることも見て取れる。同様の表現は1980年生まれのリザリフィレ・ザリポワ (Zölfirä Zaripova) の詩「Quran」(クルアーン) でも見られる。

Ğäräp tele - Xaq Täğälä tele ul,  
Quran tele - minem tuğan telem.  
Yäşäsennär alar - mänge yäşäsennär,  
Künellärdä häm tellärdä minem.  
アラビア語——真実なる神のことば  
クルアーンのことば——わたしのトゥガン・テル  
生きよ 永遠に生きよ  
わたしの心のなかに わたしのことばに

ここでは、「トゥガン・テル」への愛着を通じてイスラームへの信仰を表明する姿勢が読み取れる。信仰と言語の結びつきは、言語の神聖視につながる普遍的な観念であるともいえる。一神教の影響下にあるヨーロッパ諸語では聖書の言語が特別視される傾向があるし、アラビア語は「クルアーンの言語」としての地位を持つ。タタール語の場合もまた、イスラームという宗教的文脈と強く結びついている。

現代のタタールにとって、「トゥガン・テル」はイスラームへの信仰心を呼び起こすきっかけともなる。1966年生まれのアルフイヤ・ガリアフメトワ（Älfiyä Galiäxmätova）の詩「Doğa」（祈り）は、タタール語で詠むことの宗教的意義を示しているようでもある。

Tuğan telendä doğa qılsañ äñqät,  
 Yäşärem dä moñlı xis belän.  
 Çönki tatar tele belän äytkän  
 Xaq täğäläneñ isemen iñlär.  
 トゥガン・テルで祈るときにこそ  
 人生にも喜びがあふれる  
 なぜならタタール語で口にした  
 真実なる神の御名は聞き届けられるから

これをふまえると、「トゥガン・テル」は単なるコミュニケーションの手段ではなく、神との対話を可能にする特別な言語としての意味づけも持つ。タタール語は宗教言語としての性格も有しているといえるだろう。

### 3-3 「トゥガン・テル」と民族アイデンティティ、故郷との関係

「トゥガン・テル」は、民族の誇りやアイデンティティを体現するシンボルとしても詠われることが多い。2000年生まれのイルギス・ザイニエフ（İlgiz Zäyniyev）の詩「わたしのトゥガン・テル」（Minem tuğan telem）では、以下のような表現がなされている。

Tuğan telem – minem millätäm,  
 Tuğan telem – minem danlı bayraqım.  
 Yäşä, tuğan telem, mänge yäşä,  
 Yäşäsen min siña möqaddäs şatırğım!  
 トゥガン・テルはわたしの民族  
 トゥガン・テルはわたしの誇り高き旗

生きよ トゥガン・テルよ 永遠に生きよ  
あなたに捧げよう わたしの神聖なる愛を！

ここでは、「トゥガン・テル」がタタール人としてのアイデンティティのよりどころであることが示されている。「トゥガン・テル」への呼びかけは、民族への呼びかけと重なり合うのである。同様の言語観は、1966年生まれのアザト・サフィン（Azat Safin）の詩「トゥガン・テル、英雄たちのことば」（Tuğan tel, batırlar tele）にも見出される。

Babamnarım tele, batırlar tele,  
Qayğǵı-xäsrät kürgän, zar ilağan.  
Ğäziz xalqım tele – şatlıq tele,  
Tuğan telem – sinen qolñ bulsam.  
祖父のことば 英雄のことば  
悲しみに遭い すすり泣いた  
わたしの大切な民のことば 喜びのことばよ  
トゥガン・テルよ あなたの召使いであれたなら

そしてここでは「トゥガン・テル」が「英雄」や「大切な民」と結び付けられることで、タタール人の歴史を体現するものとして描かれている。こうした言語を媒介とした民族アイデンティティの表出は、世界各地の少数言語を取り巻く状況にも共通して見られる。言語学者のムフウェネは、言語が単なるコミュニケーションの手段を超えて、民族のシンボルとなる例を数多く挙げている [Mufwene 2003]。言語の保持は文化の存続にとって不可欠とする見方でもある。2008年生まれのカナト・ユゼエフ（Kanat Yuzyev）の無題の詩にも、「トゥガン・テル」へのそうした思いが吐露されている。

Tıpırçına-tıpırçına tuğan tel,  
Telmäreşep, tıpırçına tormışım.  
Üz telendä baxil buldı äbi-babam,  
Ülgän teldä wağaz äytäm, yuq, bulmışım.  
もがきながら生きるトゥガン・テルよ

せかせかと もがきながら生きるわたしの人生よ  
 祖父母はトゥガン・テルで祈りを捧げた  
 死にゆくことばで説教をするのか いや 断じてそんなことは

「もがきながら生きるトゥガン・テル」という表現は、タタール語の存続が危機に瀕している状況を示唆している。母語の命運は、民族の命運と直結しているのだ。その意味で、「トゥガン・テル」を讃える詩的言説は、民族の尊厳と独自性を守ろうとするアイデンティティの政治の表れと見ることもできる。特にソ連解体後のタタール社会では、民族意識の高揚とともにタタール語の再評価が進んだ。タタール語の詩作は、そうしたタタール・ルネサンスの精神を体現する営為でもある。

加えて、「トゥガン・テル」は、故郷や母なる大地といったイメージとも結びつく。1985年生まれのアムナラ・ハイルリナ (Gulnara Xayrullina) の無題の詩には次のような一節がある。

Üstergän tuğan yağım tele ul,  
 Äni tele, äbi-babam tele ul.  
 Bälki şuniñ öçen gäşiç min aña,  
 Bälki şuniñ öçen cırlar cırlıym da.  
 育んでくれた故郷のことば  
 母のことば 祖父母のことば  
 だからこそわたしは愛するのだろう それを  
 だからこそわたしは歌うのだろう 歌を

ここでは母語が「育んでくれた故郷のことば」と形容され、故郷の自然や文化と一体のものとして捉えられている。同様に、2010年生まれのマリカ・イブラヒモワ (Mälikä İbrahimova) による「Tuğan yaq」(生まれ故郷) では、母語と父母、そして故郷とのつながりが印象的に描かれている。

Tuğan telem - ätkäm-änkäm tele,  
 Tuğan telem - tuğan yağım cırı.

Kön-tönömdä išetäm min anı,  
 Görlägändä dä, uyaŋanda da.  
 わたしのトゥガン・テル——父と母のことば  
 わたしのトゥガン・テル——生まれ故郷の歌  
 日々わたしはそれを耳にする  
 眠りについてても 目覚めても

「トゥガン・テル」は父母から教えられるものであると同時に、生まれ故郷を象徴する歌のようなものだという。ここでは「トゥガン・テル」が家族のことばであると同時に、故郷の文化やアイデンティティを体現するものとしても意味づけられている。さらに、1960年生まれのブラト・イブラヒモフ (Bulat İbrahimov) の詩「トゥガン・テルで」(Tuğan teldä) では、「トゥガン・テル」が大地や川といった自然と重なり合う。

Tuğan telem - ecälär tele,  
 Tuğan yağım cılğaları, kır-kuyları.  
 Tuğan telendä matur cılğam,  
 Yämyäşel ğenä urmanım şaulap cırlıy.  
 我がトゥガン・テル——姉妹のことば  
 故郷の川よ 野原よ  
 そのトゥガン・テルで歌うは美しい川  
 青々とした森がただ騒がしく歌う

このような「トゥガン・テル」と自然、故郷とのつながりを想起させる比喩表現の多さは注目に値する。ことばが大地に根ざし、風景と一体化する。そこには、言語を生態系の一部として捉えるホリスティックな視点も垣間見える。社会言語学者のスクットナブ=カンガスとフィリップソンは、言語の権利を生物多様性の文脈から論じ、言語を絶滅危惧種のアナロジーで捉える言語的人権 (linguistic human rights) という概念を提唱している [Skutnabb-Kangas & Phillipson 2008]。このパラダイムに照らせば、詩に込められた「トゥガン・テル」への思いは、単なる懐古趣味ではなく、文化的生態系の

維持を求める政治的要求としても読み解くことができるのではないか。

もちろん、言語と民族性の安易な結びつけには慎重を要する。言語ナショナリズムの発想は、言語を画一化しマイノリティを排除する方向に向かいがちだからだ。しかしその一方で、詩的想像力を通じて言語の多様性の価値を訴えかける営為もまた、無視はできない。

タタール語詩歌における「トゥガン・テル」は、単なる意思伝達的手段としての言語に留まらず、話者の生の様式そのものを体現する存在として立ちあらわれる。そこで繰り広げられるのは、言語の保持と断絶、再生と創造をめぐるドラマでもある。21世紀のタタール語詩歌は、そうした言語の生態系の只中で紡ぎだされているといえよう。

### 3-4 「トゥガン・テル」概念の重層性と言語の動態

このように、現代タタール語詩歌における「トゥガン・テル」は、母から受け継いだ家族のことはでありつつ、イスラームの信仰を体現する聖なることばでもあり、そしてタタールという民族の誇りと悲しみを同時に示す象徴的なことばでもある。詩的言語を通じて、母語をめぐる重層的な意味づけの営みが展開されているといえよう。しかし、そうした「トゥガン・テル」の意味づけは、けっして単線的なものではない。2010年生まれのマラト・ザキロフ (Marat Zäkirov) の「Tatar tele」(タタール語)と題された一篇の詩歌が示唆するのは、むしろタタール語の混淆的なあり方である。

Tatar tele - tuvım-qanım telem ul,  
 Tik ul ğına tügel, älbättä, ul…  
 Bik küp başqa tellä p belän bergäläp,  
 Bez söyläşäbez kön saen menä şul.  
 タタール語——わたしの肉体のことば  
 しかしそれだけではない もちろん それは…  
 とても多くの他の言語とともに  
 わたしたちは日々話すのだ



ここではタタール語は「わたしの肉体のことば」と呼ばれ、話者の生の核心を担う言語として称揚される。しかしそれは「それだけではない」のだという。なぜなら日常では、タタール語は「とても多くの他の言語とともに」用いられているからだ。つまり、ここで示唆されているのは、タタール語がロシア語をはじめとする他言語と混交しながら使用されている、多言語状況の現実であろう。こうした詩行からは、タタール語を単一の純粋な体系として神聖視するのではなく、他言語との雑種的な交渉の只中で捉えようとする複眼的なまなざしが感じ取れる。「トゥガン・テル」の意味づけと輪郭もまた、そのような言語の動態のなかで絶えず揺れ動いている。タタール詩人たちが「トゥガン・テル」に託す思いもまた、そのようなダイナミックな言語状況を反映して、一義的なものとはなりえない。

こうした「トゥガン・テル」の分析から浮かび上がってくるのは、言語のアイデンティティ・ポリティクスの複雑なありようである。一方では民族文化の要として称揚しつつ、他方でその言語的純粋性を相対化するまなざしが見出せる。現代のタタール詩人たちはそのような両義的な言語意識を抱えながら、しなやかに「トゥガン・テル」とのつながりを更新しようとしているのではないだろうか。そこには単なる言語ナショナリズムを超えた、新たな言語の生態系を築こうとする希求も透けて見える。

#### 4 「トゥガン・テル」概念の言語文化的意義

ここまでの考察から明らかなのは、タタール語詩歌における「トゥガン・テル」が、単なる意思伝達的手段としての言語ではなく、タタール人のアイデンティティや文化的価値観と深く結びついた存在として意味づけられているということだ。本節ではこの点をふまえつつ、「トゥガン・テル」という概念が今日のタタール世界において持つ意義について、言語と文化の関係性の観点から考えていきたい。

#### 4-1 タタール語話者にとっての「トゥガン・テル」の意味合い

タタール語詩歌に見られる「トゥガン・テル」の諸相は、タタール語がその話者にとってタタール人であること、タタール人らしさに深く根ざした存在であることを示している。こうした母語の位置づけは、言語の手段的機能を越えた本質的価値に光を当てる。

タタール語の象徴性は歴史的経緯によって強化されてきた。ソ連時代にタタール語の訴求力は低下したが、ソ連解体後は母語の重要性を訴える民族主義的言説が台頭し、タタールスタン共和国ではタタール語の国家語化など言語復興政策が実施された。しかし今なおタタール語の社会的地位は不安定で、こうした状況下で「トゥガン・テル」への愛着を訴えかける行為は、単なる文学的修辞を超えた、言語の存続をかけた闘争の表明とも解釈できよう。

#### 4-2 「トゥガン・テル」を通じたタタール文化の継承と発展

「トゥガン・テル」が民族文化そのものを体現する存在だとすれば、詩的言語もまたタタール文化の精髓を映し出す装置といえる。母語で詩作することは、その言語に蓄積された文化的記憶を呼び覚まし、新たな意味を紡ぎ出す創造的行為でもある。

母語の創造性は異文化との邂逅によってさらに喚起される。詩人でありタタール文学者のハンナノフは、タタール文学がロシア文学やヨーロッパ文学など様々な文化的水脈を吸収しながら、独自の美学を打ち立ててきた経緯を論じる [Xannanov 2011]。「トゥガン・テル」は他者との対話を通じて豊穡化してきたともいえるだろう。むろん、言語接触の影響は一様ではない。ロシア語からの借用語の増加がタタール語の純粋性を脅かすとの懸念もある。しかし、異質な要素を取り込み自らを複数化していくことこそ、言語の生命力の証左ともいえるのではないか。

### 4-3 言語の復権と詩的想像力

現代のタタール語詩歌が示すのは、言語の危機と再生をめぐる、たゆまぬ闘争のプロセスでもある。言語の消滅は民族の誇りと独自性の喪失につながりかねず、タタール詩人の訴えは少数言語を話す人々に共通する。世界の言語の約40%が滅亡の危機に瀕しているとされるが [UNESCO 2010]、少数言語の復権をめざす取り組みも世界各地で活発化している。

タタール文学者のイブラギモフは、タタール語の新たな表現の創出が、民族のアイデンティティの再構築につながると指摘する [Ibragimov 2018]。つまり、詩人は言語を媒介に人々の内面に働きかけるともいえ、「トゥガン・テル」をめぐる詩的営為は言語だけでなく、話者をも変容させずにはおかない。

このように、「トゥガン・テル」の詩的表象は単なる美的機能を超えて、言語と話者の存在様式そのものに介入する。現代タタール語詩歌の革新性は、新しい美的理想の創造に向けた意欲にある。タタールの詩人たちは、「トゥガン・テル」を希求することで言語と文化のダイナミズムに身を投じている。現代タタール語詩歌が示すのは、言語の純粹性を守ることで多様性を称揚することでもなく、言語を生成変化の途上にあるものとして引き受け、その只中で「トゥガン・テル」を更新し続ける意志なのであろう。

## 5 おわりに

本稿では、現代タタール語詩歌における「トゥガン・テル」の表象分析を通して、「トゥガン・テル」の概念がタタール世界においていかに意味づけられ、またいかなる文化的意義を担っているのかを考察してきた。詩的言語に埋め込まれた「トゥガン・テル」の諸相からは、言語がアイデンティティや文化と分かちがたく結びついた存在であるという、タタール語をめぐる重層的な意味の地平も浮かび上がる。

### 5-1 アンビバレントなシンボルとしての「トゥガン・テル」

詩歌の分析と考察からは、現代のタタール詩人たちが「トゥガン・テル」を単なる意思疎通の手段としてではなく、自己と世界を媒介する存在論的な契機として捉えていることが読み取れる。「トゥガン・テル」は、母や父との絆を示す家族のことばであり、イスラームへの信仰を体現する聖なることばであり、そしてタタールという民族の誇りと嘆きを同時に喚起する、アンビバレントなシンボルでもある。

こうした詩的モチーフの背後には、言語の手段的機能を越えた本質的価値へのまなざしがある。母語とは単に情報をやりとりする記号の体系ではなく、話者の存在そのものを根底で支える文化遺産でもある。詩人たちはそれを「トゥガン・テル」への愛着として謳いあげることで、言語がアイデンティティの核心に触れる情動的な力を持つことを照らし出している。

また、「トゥガン・テル」を希求する姿勢は、同時に言語の存続への危機感の表れでもあろう。民族のことばの地位が揺るがされるなか、詩人たちは消滅の危機に瀕した母語のありようを嘆き、その復権を訴える。そこには、言語の画一化に抗して、タタール語の独自性を守ろうとする言語の人権の精神が息づいているようにも見える。

一方で、タタール詩人による「トゥガン・テル」の探求は、言語の純粋性を求める単なる復古主義に回収されるものではない。母語はつねに異言語との邂逅を通じて更新されていく。言語に本源的な固有性を見出すのではなく、言語をダイナミックな生成変化の途上にあるものとして引き受けること——「トゥガン・テル」の詩的表象が示唆するのは、そうした言語と文化の絶え間ない交渉の軌跡にほかならない。

### 5-2 言語の詩学と政治性

現代のタタール詩人たちは、言語の規範的な秩序に介入し、その変革を促す者でもある。新たな表現や語彙の創出は、タタール語の可能性を拡張する

だけでなく、話者の意識変容をも促す。つまり、「トゥガン・テル」という概念を更新することは、言語だけでなく、民族のあり方そのものを問い直す批評的実践ともいえる。

ここで想起されるのは、フーコーの「言説」概念である [Foucault 1969]。フーコーによれば、言説とは単なる記号の体系ではなく、人間の営みを方向づける力を持った実践である。言説が編成するのは、ものの見方や考え方を規定する認識の枠組みであり、言説空間で主体のあり方そのものが形づくられる。この視座からすれば、「トゥガン・テル」をめぐる詩的言説もまた、タタール語という言語の存在様式のみならず、タタール人という主体のあり方をも構築する装置として立ちあらわれてくる。

さらに、スピヴァクの「サバルタン」概念を援用するなら、タタール詩人の言語実践は、多数派の言説に回収されない声なき声を響かせる抵抗の身振りとしても解釈しうる [Spivak 1988]。ロシアという巨大な国家言説の周縁に置かれたタタール語を、声高に謳いあげること。それ自体が、置かれた状況を書き換えようとする政治的行為になるだろう。「トゥガン・テル」を希求する詩人たちのまなざしには、言語と権力の非対称的な布置を問い直し、オルタナティブな生の可能性を切り拓こうとする、サバルタンの身振りが託されているようにも見える。

また、本稿では現代タタール語詩歌における「トゥガン・テル」の表象は、大きく3つの意味領域を形作っていることを示した。すなわち、(1) 母、父、家族との絆、(2) イスラームの精神性、(3) 民族のアイデンティティ・郷土愛である。これらはいずれも、「トゥガン・テル」が話者の生のありようを根底で規定する存在として意味づけられていることを示唆している。「トゥガン・テル」とは、まさに話者の生そのものを体現する「祖なることば」なのだ。

こうした言語観は、言語相対論の再解釈を迫るものでもある。タタール詩人にとって、タタール語は単に現実を切り取るフィルターではない。むしろ、タタール語を介して初めて、自らが帰属する共同体の歴史や文化、感性

や世界観が立ちあらわれてくる。つまり、タタール語の比喩構造それ自体が、タタール人の経験のあり方を方向づけているともいえる。

さらに、「トゥガン・テル」をめぐる詩的言説は、言語の政治学の文脈からも示唆に富んでいる。それは単なる個人的な感傷ではなく、母語の復権を求める集合的意志の表出でもあるからだ。

社会言語学者のセバは、少数言語の文学が「対抗言語としての力」を持ちうると論じているが [Sebba 2018]、まさにタタール語詩歌は、ロシア語の覇権に抗う対抗言語の砦として機能してきたといえよう。もっとも、そうした言語の政治性はけっして単線的なものではない。なぜなら「トゥガン・テル」は、自らの純粋性を守るのではなく、ロシア語をはじめとする異言語との邂逅を通じて豊穣化してきたからだ。その意味で、現代タタール語詩歌の力動性は、言語を「純粋な」状態で固定化するのではなく、言語接触のもたらす雑種性を引き受ける、いわば「多言語状況のポエティクス」のうちにごそ見出されるべきなのかもしれない。

このように、「トゥガン・テル」概念の考察は、単にタタール語の状況をめぐる議論だけにとどまらない、より広範な射程を持っている。それは端的に、言語というものがそもそもいかにして立ちあらわれるのかという問いでもある。主体はいかにして言語を我がものとし、同時に言語によって形作られていくのか。その絶え間ない交渉のプロセスを「母語」という原初的な契機から捉え直すこと——タタール詩人たちが「トゥガン・テル」を希求する身振りは、そのような言語の根源的な詩学と政治性へのまなざしをはらんでいるようにも思えてならない。

本研究では、現代タタール語詩歌を手がかりに、ことばをめぐる意味の地層の一端を明らかにしてきた。だがこの作業は、なお多くの課題を残している。「トゥガン・テル」という概念が孕む語りえぬものの影に、いかに迫っていけるのか。ただ1編の拙論をもって論じ尽くすことなどできはしない。とはいえ、数篇の詩歌の紹介を通して、いくつかの可能性を垣間見ることができたように思う。小さくとも、それがタタール世界との連帯の一步になる

と信じたい。

〔引用文献〕

- Bucholtz, M. & Hall, K. 2004. Language and Identity. In A. Duranti (eds) *A Companion to Linguistic Anthropology*, pp. 369-394. Blackwell.
- Daucé, F. 2015. Patriotic Unity and Ethnic Diversity at Odds : The Example of Tatar Organisations in Moscow. *Europe-Asia Studies* 67 ( 1 ) : 68-83.
- Duff, P. A. & S. Talmy 2011. Language Socialization Approaches to Second Language Acquisition. In D. Atkinson (eds) *Alternative Approaches to Second Language Acquisition*, pp. 95-116. Routledge.
- Fishman, J. A. 1991. *Reversing Language Shift : Theoretical and Empirical Foundations of Assistance to Threatened Languages*. Multilingual Matters.
- Foucault, M. 1969. *L'archéologie du savoir*. Gallimard.
- Gilazetdinova, G. K., Edikhanov, I. Z. & Aminova, A. A. 2014. Problems of Ethnocultural Identity and Cross-Language Communication. *Journal of Language and Literature* 5 ( 3 ) : 29-42.
- Ibragimov, M. I. 2018. *Natsional'naya identichnost' tatarskoy literatury : sovremennyye metody issledovaniya : ocherki*. Akademiya nauk Respubliki Tatarstan Institut yazyka, literatury i iskusstva im. Ibragimova.
- Lakoff, G. & Johnson, M. 1980. *Metaphors we live By*. University of Chicago Press.
- Leavitt, J. 2011. *Linguistic Relativities : Language Diversity and Modern Thought*. Cambridge University Press.
- Lucy, J. A. 1992. *Language Diversity and Thought : A Reformulation of the Linguistic Relativity Hypothesis*. Cambridge University Press.
- Mufwene, S. S. 2003. Language Endangerment : What Have Pride and Prestige Got to Do with It? In B. Joseph, J. Stefano, N. Jacobs & I. Lehiste (eds) *When Languages Collide*, pp. 324-345. Ohio State University Press.
- Ochs, E. 1988. *Culture and Language Development : Language Acquisition and Language Socialization in a Samoan Village*. Cambridge University Press.
- Ostanina-Olszewska, J. & Despot, K. S. 2017. When “soul” is lost in translation : Metaphorical Conceptions of “soul” in Dostoyevsky’s Original “Братья Карамазовы” (“The Brothers Karamazov”) and its Translations into Polish, Croatian and English. *Cognitive Approaches to Semantics and Contrastive*

- Linguistics* 17 : 1-16.
- Sapir, E. 1949. *Culture, Language and Personality*. University of California Press.
- Sebba, M. 2018. Multilingualism in Written Discourse : An Approach to the Analysis of Multilingual Texts. *International Journal of Bilingualism* 17 (1) : 97-118.
- Shakurova, M. M. & Mirzagitov, R. H. 2014. Linguistic Analysis of Tatar Language Textbooks for Non-Russian Students. *Life Science Journal* 11 (10) : 674-677.
- Shamsutdinova, A. I. 2022. Assotsiativnoye pole kontsepta “Rodnoy yazyk” (“Tugan tel”) v soznanii nositeley tatarskoy lingvokultury (po dannym sotsiolingvisticheskogo eksperimenta, provedennogo v Litseye №177). *Vestnik nauchnykh konferentsiy* 8-2 (84) : 110-112.
- Skutnabb-Kangas, T. & Phillipson, R. 2008. A Human Rights Perspective on Language Ecology. In A. Creese, P. Martin & N. H. Hornberger (eds) *Encyclopedia of Language and Education, 2nd edition, Volume 9: Ecology of Language*, pp. 3-14. Springer.
- Spivak, G. C. 1988. Can the Subaltern Speak? In C. Nelson & L. Grossberg (eds) *Marxism and the Interpretation of Culture*, pp. 271-313. University of Illinois Press.
- Tatarstan kitap nashriyati. 2018. *Zaman awazlari*. Tatarstan kitap nashriyati.
- UNESCO 2021. *UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger*. UNESCO.
- Vygotsky, L. S. 1986. *Thought and Language*. The MIT Press.
- Whorf, B. L. 1956. *Language, Thought and Reality : Selected Writings*. MIT Press.
- Xannanov, R. 2011. *Törek-tatar ädäbi baglanışlari*. Qazan utlari.
- Yusupova, A. S. 2014. Tatar Language Dictionaries of XIX Century as a Unified Historical and Cultural Phenomenon. *World Applied Sciences Journal* 30 (2) : 186-190.



# Interpreting the Concept of 'Tuğan Tel' in the Tatar World : A Study of Representations in Tatar Poetry

Sakurama-Nakamura, Mizuki

This study examines the concept of 'Tuğan Tel' (native tongue) in the contemporary Tatar world through an analysis of its representation in Tatar poetry. The study reveals that 'Tuğan Tel' is not merely a means of communication but a cultural foundation that supports the identity of the Tatar people. The poetic representations of 'Tuğan Tel' are analyzed from three perspectives : (1) its relationship with mother, father, and family, (2) its connection to Islam and spirituality, and (3) its association with ethnic identity and love for the homeland. The analysis shows that 'Tuğan Tel' embodies the very existence of the speakers and serves as an ambivalent symbol evoking both pride and sorrow of the Tatar people. The study also discusses the poetics and politics of language, suggesting that the poetic discourse on 'Tuğan Tel' not only constructs the mode of existence of the Tatar language but also shapes the subjectivity of the Tatar people. The study contributes to the understanding of the fundamental poetics and politics of language by re-examining the primordial moment of 'mother tongue' in the context of the Tatar world.